翻訳：大山万容（京都大学大学院）、加藤由崇（京都大学大学 院）、黒川悠輔（早稲田大学大学院）
翻訳コーディネイター：吉 村雅仁（奈 良教育大学）
本翻訳は，科
研費助成研究「多言語・多文化教材の開発による学校と地域の連携構築に向けた総合的研究」（23330245, 代表：山西優二）の 一環として行われたものである。

Traduction : Oyama Mayo (Kyoto University), Kato Yoshitaka (Kyoto University), Kurokawa Yusuke (Waseda University)
Coordinateur de la traduction : Masahito Yoshimura（Université pédagogique de Nara)
Cette traduction a été effectuée dans le cadre du projet ”A Comprehensive Study for the Development of Multi-lingual/cultural Teaching Materials Connecting School and Community”

原本の著作権は、欧州評議会欧州現代語センターに帰属する。
この翻訳は、CARAP - Compétences et ressources (M. Candelier et al., Conseil de l'Europe, 2012)に含まれるリスト部分である。

© Conseil de l’Europe, CELV pour la version d’origine
- Traduction des listes contenues dans Le CARAP - Compétences et ressources (M. Candelier et al., Conseil de l'Europe, 2012)

| | 知識 |
|---|---|
| | |
| | 一節. 記号体系としての言語 |
| K-1 | 言語の働きについての原則をいくつか知っている。 |
| K-1.1 | 言語は記号から成り立っており、それは一つの（記号論的）体系を持つことを知っている。 |
| K-1.2 | 言葉とその指示対象＜その言葉が指す実体＞、または*能記*＜単語、構造、音調…＞と意味との関係は、そもそも恣意的であることを知っている。 |
| K-1.2.1 | 単語と指示対象に関連がある擬音（声）語の場合でさえ、ある程度の恣意性は残り、言語によって異なることを知っている。 |
| K-1.2.2 | 異なる言語間で二つの単語が゜同じ形をもつ/似たように見える゜としても、それらが自動的に同じことを意味するとは限らないということを知っている。 |
| K-1.2.3 | 文法範疇は、現実を“そのまま”写したものではなく、現実を言語によって体系づけるある一つの方法であるということを知っている。 |
| K-1.2.3.1 | 文法的性と生物学的性は混同してはいけないことを知っている。 |
| K-1.3 | ゜単語と指示対象/能記と意味゜の恣意的な関連は、ほとんどの場合明示的ではない形で、言語コミュニティー内の慣習として確立されている／決まっていることを知っている。 |

| | |
|---|---|
| K-1.3.1 | 同じ言語コミュニティー内では、個々人は同じ能記に対しては、おおよそ同じ意味を与えることを知っている。 |
| K-1.4 | 言語は゜規則/規範゜に従って機能することを知っている。 |
| K-1.4.1 | こうした゜規則/規範゜はそれを応用する際の厳格さ/柔軟さにおいて異なることがあり、話者が暗示的な内容を伝えたいと思うときには、意図的に破られることもあるということを知っている。 |
| K-1.4.2 | こうした゜規則/規範゜は時間がたち空間的な移動が加われば、さらに発展しうることを知っている。 |
| K-1.5 | 人々が同一言語だと思っているものの中には、常にいくつもの種類があることを知っている。 |
| K-1.6 | 話し言葉か書き言葉によって、言語の機能が異なることを知っている。 |
| K-1.7 | ある特定の言語（/母語/学校教育の言語/外国語/…）に関する言語的性質の知識を有している。 |
| | |
| | 二節. 言語と社会 |
| K-2 | ゜社会が言語の働きにおいて果たす役割／言語が社会の働きにおいて果たす役割゜を知っている。 |
| K-2.1 | 言語の共時的な変種{地域的、社会的、世代的、職業的、特定の人々に関する変種（国際英語、“フォリナートーク”、母親言葉）}についての知識がある。 |
| K-2.1.1 | こうした変種の一つひとつは、ある文脈、ある状況下では正当となりうることを知っている。 |
| K-2.1.2 | こうした変種を解釈する為には、それを使用する話者の社会文化的特徴を考慮しなければならないことを知っている。 |
| K-2.1.3 | 社会的地位（/公用語/地域語/俗語/…）に関するいくつかの言語範疇を知っている。 |
| | |
| K-2.2 | 誰もが少なくとも一つの言語共同体に属していること、また多くの人が二つ以上の言語共同体に属していることを知っている。 |
| ++ | |
| K-2.3 | アイデンティティは、意思疎通の過程において、“他者”との関わりの中で゜構築され/明確化される゜ことを知っている。 |
| ++ | |

| | |
|---|---|
| K-2.4 | 自分が使用する言語は、他の事象と同様に、アイデンティティの構築に寄与することを知っている。 |
| ++ | |
| K-2.5 | 自身の言語に関する゛状況/環境゛について、いくつかの特徴を知っている。 |
| ++ | |
| K-2.5.1 | 自身の環境の社会言語的な多様性について知識がある。 |
| ++ | |
| K-2.5.2 | 自分の環境において様々な言語（/日常言語/学校教育の言語/家庭言語/…）が果たす役割を知っている。 |
| +++ | |
| K-2.5.3 | 自分自身の言語的アイデンティティは（個人史、家族史、国家史などのために）複雑になりうることを知っている。 |
| ++ | |
| K-2.5.3.1 | 自分自身の言語的アイデンティティを決定している要因を知っている。 |
| ++ | |
| K-2.6 | ある言語の発展／出現に影響を与えた／与えている歴史的事実（国民／人々の間の関係゛、移動する人々との関係゛に関するもの）について知識がある。 |
| ++ | |
| K-2.7 | 言語についての知識を身につける際には、゛歴史的/地理的゛知識も身につけることになることを知っている。 |
| ++ | |
| | 三節. 言語・非言語コミュニケーション |
| | |
| K-3 | コミュニケーションの機能に関するいくつかの原則を知っている |
| ++ | |
| K-3.1 | コミュニケーションには、言語コミュニケーションの他に、他の形態があること[言語コミュニケーションはコミュニケーションがとれる形態の一つに過ぎないこと]を知っている |
| ++ | |
| K-3.1.1 | 動物が行うコミュニケーションのいくつかの例を知っている |
| ++ | |
| K-3.1.2 | 人間の非言語コミュニケーション（手話、点字、ジェスチャー…）のいくつかの例を知っている |
| ++ | |

| | |
|---|---|
| K-3.2 | 自分自身のコミュニケーションレパートリー｛言語と変種、談話ジャンル、コミュニケーション形態｝に関する知識を有している |
| ++ | |
| K-3.3 | 人は自分自身のコミュニケーションレパートリーを、コミュニケーションが行われている社会的・文化的文脈に適合させなければならないことを知っている |
| + | |
| K-3.4（変 | コミュニケーションを容易にする言語的手段｛簡略化/言い換え等｝があることを知っている |
| ++ | |
| K-3.4.1（ | 人はコミュニケーションを容易にする為に、言語的類似性｛°系統的つながり、借用、普遍性°｝に頼ってみることができると知っている |
| +++ | |
| K-3.5 | コミュニケーション能力は言語的、文化的、社会的性質についての（一般に明示的ではない）知識に依拠していることを知っている |
| ++ | |
| K-3.5.1 | コミュニケーションをとるために、人は意のままに使える非明示的・明示的知識をもち、また他者も同じ次元の知識をもつことを知っている |
| ++ | |
| K-3.5.2 | 自分自身のコミュニケーション能力のよりどころとなる非明示的知識のいくつかの側面を知っている |
| ++ | |
| K-3.6 | 多言語・多文化能力の観点からすると、異言語を話す人はコミュニケーションにおいてある特定の地位（コミュニケーションにおける特別な地位）を有することを知っている |
| ++ | |
| K-3.6.1 | 異言語話者で、ある言語についての知識が限定的である場合、その人はコミュニケーションにおいて困難に直面することがありうること、そしてその人はコミュニケーションをより満足の行くものとするために支援を受けるかもしれない/受ける必要があることを知っている |
| ++ | |
| K-3.6.2 | 異言語話者で、少なくとも別の1つの言語/文化に関する知識を有する人は、他の言語/文化との仲介的役割を果たしうると知っている |
| + | |

| | |
|---|---|
| | 四節. 言語の進化 |
| | |
| K-4 | 言語は絶えず進化していることを知っている |
| +++ | |
| K-4.1 | 言語はいわゆる「同族」関係によって互いに結びついていることを知っている/言語には「語族」というものがあることを知っている |
| +++ | |
| K-4.1.1 | いくつかの語族について知っており、その語族に属するいくつかの言語を知っている |
| +++ | |
| K-4.2 | ある言語から別の言語への「借用」現象について知っている |
| ++ | |
| K-4.2.1 | 言語的「借用」が起こる条件｛接触の状況、新たな製品/技術に伴う語彙のニーズ、様式の変化による効果...｝について知っている |
| ++ | |
| K-4.2.2 | 言語的「借用」と言語的「同族」の違いを知っている |
| ++ | |
| K-4.2.3 | いくつかの「借用」は非常に多くの言語に広がっている（タクシー、コンピューター、ホテル...）ことを知っている |
| +++ | |
| K-4.3 | 言語史（/ある言語の起源/語彙的進化・音韻的進化/...）に関していくらかの知識を有している |
| ++ | |
| | 五節. 多元性、多様性、多言語主義、複言語主義 |
| | |
| K-5 | 言語の多様性/多言語主義/複言語主義についていくらか知識がある |
| +++ | |
| K-5.1 | 世界には非常に多くの言語があることを知っている |
| +++ | |
| K-5.2 | 言語に使われている音には多くの種類｛音素、リズム形式...｝があることを知っている |
| +++ | |
| K-5.3 | 書記法には非常に多様な種類があることを知っている |
| +++ | |
| | |

| | |
|---|---|
| K-5.4 | 多言語/多言語主義の状況は国/地域｛言語の数/地位、言語に対する態度...｝によって多様であることを知っている |
| +++ | |
| K-5.5 | 多言語/複言語主義的状況は、進化するものであることを知っている |
| +++ | |
| K-5.6 | 社会言語的状況は複雑になり得ると知っている |
| +++ | |
| K-5.6.1 | 国と言語を混同してはいけないと知っている |
| ++ | |
| K-5.6.1.1 | 非常にしばしば、一つの国で複数の言語が使われる/複数の国で一つの同じ言語が使われていると知っている |
| ++ | |
| K-5.6.1.2 | 非常にしばしば、言語と国の境界は一致しないということを知っている |
| ++ | |
| K-5.7 | 自分のおかれた環境や、そこからの距離を問わず、別の場所における多言語/複言語主義的な状況の存在に気づいている |
| +++ | |
| | **六節. 言語間の類似性と差異** |
| | |
| K-6 | 言語/言語的変種には類似点・差異があることを知っている |
| +++ | |
| K-6.1 | それぞれの言語が独自の体系をもっていることを知っている |
| ++ | |
| K-6.1.1 | 自分自身の言語を構成する体系は、数ある体系のうちの一つの可能性にすぎないということを知っている |
| +++ | |
| K-6.2 | それぞれの言語は現実を認識/組織するための独自の、部分的には特有の方法をもっていることを知っている |
| +++ | |
| K-6.2.1 | それぞれの言語が世界を表現し/「切り取る」特定の方法は、文化による影響を受けていることを知っている |
| ++ | |
| K-6.2.2 | それゆえ、ある言語から別の言語への翻訳は、単純なラベル交換のような逐語訳で済むことはまれであって、現実の異なる切り取り方に必然的に含まれることを知っている |

| | |
|---|---|
| ++ | |
| | |
| K-6.3 | ある言語（/母語/学校言語/）の機能を描写する際に用いられる区分は、必ずしも他の言語でも存在する区分ではない｛数、性、冠詞. . . ｝ことを知っている |
| +++ | |
| K-6.4 | こうした区分が他の言語に見られる時でも、それらは必ずしも同じように組織されているとは限らないと知っている |
| +++ | |
| K-6.4.1 | ある区分を構成する要素の数は言語によって異なり得る｛男性と女性/男性・女性・中性...｝ということを知っている |
| ++ | |
| K-6.4.2 | 同じ単語でも言語によって性が異なり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-6.5 | それぞれの言語は独自の音声/音韻体系をもっていることを知っている |
| +++ | |
| K-6.5.1 | 他言語の音声/音声体系は、程度の差こそあれ、自分自身の言語とは異なり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-6.5.2 | 他言語には、訓練されていない耳では認識さえできないが、その言語使用者であれば、他の単語との聞き分けを可能にするような音があることを知っている。 |
| ++ | |
| K-6.5.3 | 言語間には韻律（/リズム/強勢/抑揚/）において、互いに類似性と差異があることを知っている |
| ++ | |
| K-6.6 | 一つの言語から違う言語を見たとき、一語ごとに対応関係があるわけではないことを知っている |
| ++ | |
| K-6.6.1 | 言語は、同じことを表現するのに常に同じ数の単語を使うとは限らないことを知っている |
| ++ | |
| K-6.6.2 | ある言語における一つの単語が、別の言語では2語以上の単語に対応することがあることを知っている |
| ++ | |
| K-6.6.3 | ある言語では現実のある側面を単語で表現するが、また別の言語ではそれを単語で表現しないということがあると知っている |

| | |
|---|---|
| ++ | |
| K-6.7 | 単語が構成される方法は言語によって異なることを知っている |
| ++ | |
| K-6.7.1 | 言語は区分/関係｛一致/複数/所有…｝を示すのに異なる方法を使うことがあることを知っている |
| +++ | |
| K-6.7.2 | 一つの語を構成する要素の順番は言語によって異なり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-6.7.3 | ある言語で複合語の使用によって表現されることは、他の言語ではいくつかの単語を使用することに相当することがあることを知っている |
| ++ | |
| K-6.8 | 発話が組織される仕方は言語によって異なり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-6.8.1 | 語順は言語によって異なり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-6.8.2 | 発話要素（/語の集まり/語/）間の関係は言語によって｛語順を通して、語尾変化を通して、前置詞/後置詞を通して…｝異なって表現され得ることを知っている |
| +++ | |
| K-6.9 | 書記体系は様々に機能することがあることを知っている |
| +++ | |
| K-6.9.1 | 書記形態｛表音文字、表意文字、象形文字｝は複数存在することを知っている |
| ++ | |
| K-6.9.2 | 書くときに使用される文字単位の数は、言語によってかなり異なりうることを知っている |
| ++ | |
| K-6.9.3 | 似た音が、異なる言語では全く違う書記法であらわされることがあることを知っている |
| ++ | |
| K-6.9.4 | あるアルファベット体系における書記素と音素の間の対応は、各言語に特有のものであるということを知っている |
| ++ | |
| K-6.10 | 言語的/非言語的コミュニケーション体系には、言語によって類似点・差異があるということを知っている |
| ++ | |

| | |
|---|---|
| K-6.10.1 | 様々な言語では感情を表現する言語/非言語的方法が異なるということを知っている |
| ++ | |
| K-6.10.1.1 | いくつかの言語における、感情を表現する方法の違いをいくつか知っている |
| ++ | |
| K-6.10.2 | 同じように見えるかもしれない言語行為（/挨拶のしきたり/丁寧さを表す決まり文句/...）が、必ずしも言語によって同じようには機能しないことがあることを知っている |
| ++ | |
| K-6.10.3 | 話しかけの規則[他者に話しかける様式に関すること]は言語によって異なりうると知っている｛誰が先に話すのか、誰が誰に話すのか、tu/vousのように、誰を親称で、誰を敬称で呼ぶか｝ |
| ++ | |
| | 七節. 言語と習得/学習 |
| | |
| K-7 | 人がどのようにある言語を習得/学習するのか知っている |
| ++ | |
| K-7.1 | ある言語のスピーキングを学ぶ方法の背後にある基本的な原則のいくつかを知っている |
| + | |
| K-7.1.1 | 言語学習は長く、困難な過程であることを知っている |
| + | |
| K-7.1.2 | ある言語をまだマスターしていない時に間違いを犯すことは普通のことであることを知っている |
| + | |
| K-7.1.3 | 絶え間ない修正や嘲りをすると、それが学習者を助けることもあるが、同様に学習過程を「妨害」しうると知っている |
| + | |
| K-7.1.4 | 完全にある言語を知っているということは決してない/常に知らないものは存在し、また常に改善の余地はあるということを知っている |
| + | |
| K-7.2 | 言語を学ぶために、人は言語間の（構造的/談話的/語用論的）類似性を足場とすることができることを知っている |
| +++ | |
| K-7.3 | 言語的差異に対して肯定的な態度をもっていれば、人はより良く学ぶことができることを知っている |

| | |
|---|---|
| +++ | |
| K-7.4 | 言語を見る/認識する方法がその言語の学習に影響を与えることを知っている |
| ++ | |
| K-7.5 | 言語学習には異なる方略があり、それらの関連は学習者の目的によって変わるということを知っている |
| ++ | |
| K-7.5.1 | 様々な学習方略とそれらの適切さを知っている｛聞いてリピートする、何度か書き写す、訳す、一人で発話してみる…｝ |
| ++ | |
| K-7.6 | 目的に合わせて使えるよう、自分の使う学習方略をよく知っていることは有用だと知っている |
| ++ | |
| | 八節. 文化：一般的特徴 |
| | |
| K-8 | 文化とは何か/文化がどのように機能するかについて知識を有している |
| +++ | |
| K-8.1 | 文化はその構成員によって（少なくとも部分的に）共有されている、あらゆる種類の慣習/表象/価値観の総体であることを知っている |
| + | |
| K-8.2 | 多かれ少なかれ異なりのある、多くの文化が存在することを知っている |
| + | |
| K-8.3 | 文化体系は複雑である／様々な領域｛社会的やりとり、周囲との関係、現実の知識、言語、テーブルマナー、…｝に現れることを知っている |
| ++ | |
| K-8.4 | それぞれの文化では、その構成員が社会的慣例/行動に関する特定の規則/規範/価値観を（部分的に）定めていることを知っている |
| +++ | |
| K-8.4.1 | 他文化のある領域｛挨拶、日常的な必要性、セクシュアリティ、死など｝での社会的慣例に関するいくつかの規則/規範/価値を知っている |
| ++ | |
| K-8.4.2 | こうした規範のいくつかは禁忌を形成しうることを知っている |

| | |
|---|---|
| +++ | |
| K-8.4.3 | こうした規則/規範/価値は、多かれ少なかれ厳格/柔軟になりうることを知っている |
| ++ | |
| K-8.4.4 | こうした規則/規範/価値は、時や場と共に進化することもあることを知っている |
| ++ | |
| K-8.5 | それぞれの文化に固有のある社会的慣例｛儀式、言語、テーブルマナーなど｝は恣意的になりうることを知っている |
| ++ | |
| K-8.6 | それぞれの文化は、少なくとも部分的に、その構成員の認識/世界の見方/考え方を決める/組織するということを知っている |
| +++ | |
| K-8.6.1 | 事実/行動/話されることは、異なる文化の構成員によって、違ったように認識される/理解されることがあることを知っている |
| +++ | |
| K-8.6.2 | 世界の知識｛数え方、測定方法、時間の測り方など｝に関連して、ある文化に固有の解釈スキーマをいくつか知っている |
| ++ | |
| K-8.7 | 文化は（自己の/他者の）行動/社会的慣例/個人的評価に影響を与えるということを知っている |
| ++ | |
| K-8.7.1 | 異なる文化のいくつかの社会的慣例/慣習を知っている |
| ++ | |
| K-8.7.1.1 | 近隣の文化のいくつかの社会的慣例/慣習を知っている |
| +++ | |
| K-8.7.2 | 異なる文化のある社会的慣例/慣習と比較した、自分自身の文化の特異性をいくつか知っている |
| +++ | |
| | 九節. 文化的・社会的多様性 |
| | |
| K-9 | 文化的多様性と社会的多様性は密接に関係していることを知っている |
| ++ | |
| K-9.1 | 文化は常に複雑であり、それ自体（多かれ少なかれ）異なり、°対立する/収斂する°ような下位文化から構成されることを知っている |

| | |
|---|---|
| +++ | |
| K-9.2 | ある一つの文化の中にも、社会的／地域的／世代的集団に結びついた文化的な下位集団が存在することを知っている |
| +++ | |
| K-9.2.1 | 社会的/地域的/世代的集団による文化的慣例のバリエーションに関する例をいくつか知っている |
| +++ | |
| K-9.2.2 | 社会的慣例に関する、ある社会的/地域的/世代的集団に特有の（自分自身の文化や他の文化における）規範をいくつか知っている |
| +++ | |
| K-9.3 | すべての個人が少なくとも一つの文化共同体の一員であり、多くの人が一つ以上の文化共同体の一員であることを知っている |
| ++ | |
| K-9.4 | 自分自身の状況/文化的境遇に関するいくらかの特徴を知っている |
| ++ | |
| K-9.4.1 | （少なくとも部分的には）自分が生きている文化について知っている |
| +++ | |
| | 十節. 文化と異文化関係 |
| | |
| K-10 | 異文化関係と異文化コミュニケーションにおける文化の役割を知っている |
| ++ | |
| K-10.1 | それぞれの文化に特有の慣習/規範/価値観は、文化的多様性の文脈内において行動/個人的決断を複雑なものにするということを知っている |
| +++ | |
| K-10.2 | 文化とアイデンティティはコミュニケーションのやりとりに影響を与えるということを知っている |
| +++ | |
| K-10.2.1 | 行動/言葉とそれらの解釈/評価のあり方は文化的基準と結びついていることを知っている |
| ++ | |
| K-10.2.2 | 文化がどのように社会的やりとりにおける役割を構築するかについて知っている |
| +++ | |

| | |
|---|---|
| K-10.3 | 文化的差異が言語的/非言語的なコミュニケーション/相互交流の困難さの根底にありうることを知っている |
| ++ | |
| K-10.3.1 | 文化的差異によって引き起こされるコミュニケーションの困難さはカルチャーショック/文化的疲弊につながることがあることを知っている |
| ++ | |
| K-10.4 | 異文化関係と異文化間コミュニケーションは、自分が他の文化に対してもっている知識/表象と、他人が自分自身の文化に対してもっている知識/表象による影響を受けるということを知っている |
| +++ | |
| K-10.4.1 | 自分がもつ文化の知識は、しばしばステレオタイプ＜現実の一側面をつかむのに簡略化され、時に役に立つ方法だが、過度の簡略化や一般化に陥る危険がある＞を含むことを知っている |
| ++ | |
| K-10.4.2 | 異文化関係や異文化間コミュニケーションに影響を与えうるような、文化に起因するステレオタイプをいくつか知っている |
| +++ | |
| K-10.4.3 | 文化的偏見の存在に気づいている |
| ++ | |
| K-10.4.3.1 | （特に自分が学んでいる言語共同体の文化について）文化に起因する偏見/誤解のいくつかの例を知っている |
| ++ | |
| K-10.5 | 自分たちの固有の行動に対して他人が与える解釈は、自分たちがそれに対して与える解釈とは異なるかもしれないということを知っている |
| +++ | |
| K-10.5.1 | 自分自身の文化的慣例は、他人からステレオタイプの形で解釈されることがあることを知っている |
| +++ | |
| K-10.5.1.1 | 自分自身の文化について他の文化が抱いているステレオタイプをいくつか知っている |
| ++ | |
| K-10.6 | 自分自身の文化と他者の文化の認識は個人的要因｛以前の経験、性格的特徴…｝にも拠るということを知っている |
| ++ | |

| | |
|---|---|
| K-10.7 | （/言語学的/言語的/文化的/）差異に対して自分自身が取るかもしれない反応について知っている[気づいている] |
| +++ | |
| K-10.8 | 社会的慣習や異文化間コミュニケーションにかかわる慣例と同様、世界/他の文化の知識や知覚を構造化する文化的基準をもっている |
| ++ | |
| K-10.8.1 | 学校での学習対象である/クラスの他の学習者が帰属している/身近な環境で目にする文化に関する知識をもっている |
| +++ | |
| K-10.8.2 | 学校での学習対象である/クラスの他の学習者が属している/身近な環境で目にする、他文化と比較した自分自身の文化を特徴づけるある特定の要素を知っている |
| ++ | |
| K-10.9 | 文化間の対立を解決するのに役立てることができる方略を知っている |
| +++ | |
| K-10.9.1 | 誤解の原因は共同して探し出し/明確化しなければならないことを知っている |
| ++ | |
| | 十一節. 文化の進化 |
| | |
| K-11 | 文化は絶えず進化していることを知っている |
| ++ | |
| K-11.1 | 文化的な慣例/価値観は様々な要因（/歴史/環境/共同体構成員の行動/...）の影響を受けて構成され、そのもとで進化するということを知っている |
| ++ | |
| K-11.1.1 | 文化共同体の構成員は、彼らの文化の進化に重要な役割を果たす/果たしうることを知っている |
| ++ | |
| K-11.1.2 | ある文化的な慣例/価値観を理解する/説明する機会はしばしば環境によって与えられるということを知っている |
| + | |
| K-11.1.2.1 | 文化の進化における制度や政治の役割を知っている |
| ++ | |
| K-11.1.3 | しばしば歴史/地理によって、ある文化的な慣例/価値観を理解する/説明する機会が与えられるということを知っている |

| | |
|---|---|
| ++ | |
| K-11.1.3.1 | ある文化の進化形成に影響を与えた/与える歴史的事実（<br>°国民/人々<br>°の関係、移民…に関する）/地理的事実をいくつか知っている |
| ++ | |
| K-11.2 | あるいくつかの文化は、特定の歴史的関係（共通の起源、過去の接触など）によって互いに結びついているということを知っている |
| ++ | |
| K-11.2.1 | （歴史、宗教、言語に結びついた）いくつかの主要な文化的領域を知っている |
| + | |
| K-11.3 | 文化は絶えず文化間でその要素を交換することを知っている |
| ++ | |
| K-11.3.1 | 文化は互いに影響しあうことがあることを知っている |
| +++ | |
| K-11.3.2 | 自分自身の文化が他の文化から借用した、文化的要素とその歴史をいくつか知っている |
| ++ | |
| K-11.3.3 | 自分自身の文化が他の文化に与えた要素をいくつか知っている |
| ++ | |
| K-11.4 | 文化的差異はグローバル化の影響のもとで縮小していることを知っている |
| ++ | |
| | **十二節. 文化の多様性** |
| | |
| K-12 | 文化の多様性に関する様々な現象を知っている |
| +++ | |
| K-12.1 | 文化は（依然として）世界の中で大きな多重性を持つことを知っている |
| ++ | |
| K-12.1.1 | 文化の多様性に関連して、慣例/習慣/慣習の違いには大きな多重性があることを知っている |
| + | |
| K-12.1.2 | 文化の多様性に関連して、価値観/規範には大きな多重性があることを知っている |
| + | |

| | |
|---|---|
| K-12.2 | ある文化を別の文化と区別することはしばしば困難であることを知っている |
| ++ | |
| K-12.2.1 | 文化間の境界はしばしば曖昧な/境界のない/移りゆくものであるということを知っている |
| ++ | |
| K-12.2.2 | 文化を区別する/「数える」ことは困難なことを知っている |
| + | |
| K-12.3 | 文化間にはきわめて多様な接触状況があることを知っている |
| +++ | |
| K-12.3.1 | 文化と国/文化と言語を混同してはいけないことを知っている |
| ++ | |
| K-12.4 | 我々の最も身近な環境で、様々な文化が常に接触していることを知っている |
| +++ | |
| K-12.5 | 文化の多様性は、ある文化が他よりも優っている/劣っていることを意味するものではないことを知っている |
| +++ | |
| K-12.5.1 | 国同士の関係はしばしば不平等である/階層化されていることを知っている |
| ++ | |
| K-12.5.2 | 様々な文化間で恣意的におかれた階層性は、歴史と共に変わることを知っている |
| ++ | |
| K-12.5.3 | 文化間で恣意的におかれた階層性は、物の見方/基準点によって変わることを知っている |
| +++ | |
| K-12.5.3.1 | 世界の地理的表象は使っている地図によって異なることを知っている |
| + | |
| | 十三節. 文化間の類似と差異 |
| | |
| K-13 | （下位）文化間には類似点・差異が存在することを知っている |
| +++ | |
| K-13.1 | それぞれの文化は（部分的に）固有の機能をもっていることを知っている |

| | |
|---|---|
| +++ | |
| K-13.1.1 | 同じ行動が文化によって異なる意味/価値/機能をもち得ることを知っている |
| +++ | |
| K-13.2 | 文化間には類似点/差異があり得ることを知っている |
| +++ | |
| K-13.2.1 | 自分の文化と他の文化の間には、類似点/差異がいくつかあることを知っている |
| ++ | |
| K-13.2.2 | 異なる文化間の社会的慣例/慣習/価値観/表現手段の類似点/差異点をいくつか知っている |
| ++ | |
| K-13.2.3 | 異なる社会的/世代的/地域的集団の文化の間には類似点/差異があることを知っている |
| ++ | |
| K-13.2.3.1 | 自分に近い環境での、異なる（社会的/世代的/地域的）集団の文化の間にある類似点/差異をいくつか知っている |
| ++ | |
| K-13.2.4 | 様々な文化において、感情(/情動/...)に関する°言語的/非言語的°な表現の違いをいくつか知っている |
| ++ | |
| K-13.2.5 | 様々な文化での、社会関係に関する°言語的/非言語的°な表現における違いをいくつか知っている |
| ++ | |
| | 十四節. 文化、言語、アイデンティティ |
| | |
| K-14 | アイデンティティはとりわけ、1つまたは複数の言語的/文化的帰属に関連して形成されるということを知っている |
| +++ | |
| K-14.1 | アイデンティティは様々な水準｛社会的、国家的、超国家的・・・｝から形成されるということを知っている |
| +++ | |
| K-14.1.1 | 欧州の文化間での類似点・差異は欧州のアイデンティティを構成する要素であるということを知っている |
| + | |
| K-14.2 | 人は常に様々な（下位）文化に帰属していることを知っている |
| ++ | |
| K-14.3 | 人は多重的/複層的/複合的アイデンティティをもつことができることを知っている |

| | |
|---|---|
| +++ | |
| K-14.3.1 | そのようなアイデンティティを身につける/生きることは困難かもしれないが、完全に調和のとれたやり方で生きることもできるということを知っている |
| ++ | |
| K-14.4 | °二つ/複数の文化的、二つ/複数の言語的°アイデンティティが存在することを知っている |
| ++ | |
| K-14.5 | 他の（支配的な）言語/文化との接触によって、文化は衰弱/疎外する危険性/文化の豊饒化が引き起こされる可能性があることを知っている |
| ++ | |
| K-14.6 | 自分自身の文化的アイデンティティは（個人史、家族史、国家史・・・のために）複雑になり得ることを知っている |
| ++ | |
| K-14.6.1 | 自分自身の文化的アイデンティティを決定づける要素をいくつか知っている |
| ++ | |
| | 十五節. 文化と文化的習得/学習 |
| | |
| K-15 | 人がどのように文化を習得/学習するか知っている |
| +++ | |
| K-15.1 | ある文化への帰属/文化変容は長期的な（大部分は非顕在的・無意識下での）学習過程の結果であることを知っている |
| ++ | |
| K-15.2 | 人はそれを望み、またその文化の価値観を肯定的に受け入れる限り、新たな文化を身につけることができることを知っている |
| ++ | |
| K-15.3 | 他文化の行動/価値観を身に付ける義務は決してないことを知っている |
| +++ | |
| K-15.4 | まだ十分にある文化について知らない時に、行動/行動の解釈に関する「間違い」を犯すことは普通のことで、このことを理解することで学習への道が開けるということを知っている |